

---

# 真 恋姫無双～戦いを終わらせる者～

紅の豚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真 恋姫無双〜戦いを終わらせる者〜

### 【Nコード】

N6066Z

### 【作者名】

紅の豚

### 【あらすじ】

村を捨てて、逃げた人が武を身に付けて戦う物語です。

## 始まりの章

夜中に目が覚めると、そこは地獄だった、耳に響くのは、人々の悲鳴と賊の下品な笑い声、俺は全身を恐怖で支配され、その場から逃げ出した。

走り続けた、その時夜だったおかげか賊に見つかる事なく逃げるこ  
とが出来た。

どの位走ったのだろうか、後ろを向いても村の形は見えなかった、  
そのときに感じた感情は賊から逃げ切れた安堵と自分に対する深い  
憎しみだった。

無意識に声が出た、ただ声が出た、ありとあらゆる感情がまざりあ  
った声だった。

オオオオオオオオオオオ！！！！

その夜は、満月だった何時も美しく感じる満月だったが、この時だ  
けはわずらわしかった。

ある日一つの噂が大陸を駆け巡った。

無手で千の賊をうち倒す武人、真紅の炎を身に纏い戦いを憎み  
いを終わらせる為に戦う者、その者の武に並び立つ者なし。  
戦いを終わらせる者

## 設定（前書き）

書き足しをしました。

## 設定

白銀・紅蓮 真名・月光

静かで無口なため、話しかけづらい感じがするがおだやかな性格で、話しているとおだやかな気持ちになる。

戦いを終わらせたいのに、戦うことしか争い終わらせることができない事に心痛めている。

心痛めても尚、自分の戦いが無駄ではないことを信じ、この戦いの果てに本当の平和があることを信じ戦い続けることを決意している。

人の気持ちに敏感で自分に向けられている好意にも敏感だが、自分の生まれ故郷を捨てて逃げた自分にその気持ちを受け取る資格がないと、その好意に気づかないふりをしている。

武器は両手両足、氣を扱うことが出来、ほぼ無制限に使用し続けることができるが、本人曰く疲れるのであまり使いたくないらしい。

字を書くことができるが、知識をはないに等しいが、作戦を立案する際、勘でその作戦に追加要素をくわえると採用される場合が多い。

因みに、髪型はナ トで、色は、銀色  
服装は

## 黄巾党の章

その日は曇りだった、ここの所ずっと日差しが強く水を飲むのもくるしくなっていた、村人は、雨がふって欲しいと願っていた。

丁度お昼頃だろうか、ポツポツと雨が降り出してきたのは、村人は喜んでた。

だからこそ気づけなかったのだ、日差しが強い日が続けば自分たちも苦しい、そして奴らも、気づいた時には遅かった、瞬く間に賊達は村を蹂躪した。

村人少女 s i d e

どうして、なんで私達の村なの私達は平和に暮らしていたいだけなのにどうしてこんなことになるの？

私達が何をしたっていうの、どうしてこんなことするのよ。

「やめて！」

無意識に声が出た、賊達は私を見ると舌を舐めずりながらこちらを見てきた、それでも私は止まらなかった、この気持ちをどうしても言葉に出したかった。

「どうしてこんなことするの！？私達が何をしたっていうの同じ人間でしょ！何でこんなことをするのよ！？」

すると賊達の笑いながらこう答えた、それは私が最も聞きたくなかった言葉だった。

「そこに村があったからだ、水がなくなったら奪い取ればいい、簡単なことだ、欲しいなら奪えばいい、弱肉強食、それがこの時代の

掟だ、まあ お前たちは運が悪かった、それだけのことだ。」

ギャハハハハハハ！！

頭の中で何かが壊れる音がした、賊の言葉は私の頭の中で繰り返されていた、賊達が言ったことが事実なら私達はこの時代でどんな希望をもつて生きていけばいいの？

分からない、ワカラナイ、分からない、ワカラナイ

賊が目の前まで来ていた。

「まあ、こんな時代に生まれた自分の不幸を呪うんだな、餓鬼・・・死ね。」

賊の持っていた錆び付いた剣が振り下ろされた。

ああ、私は此処で死ぬの？・・・いいや、こんな事が続く位なら死んだ方がマシ。

眼を閉じた、現実から眼背ける為に、待ち受けるのは、永遠の死・・・ではなく。

ガキイイイイン！！！！

鉄と鉄が、ぶつかり合う音だった。

私の目の前に居たのは、銀髪の男の人だった。

賊が何かを言う前に白い手甲が装備された腕で殴り倒していた。



「何故、生きようとしなない？」

声が響いた。

「何故、諦めた？」

低い声だった、でも、村全体に、そして心に届く声だった。

「分からないんです・・・こんな事が起こる地獄のような時代で何に希望を見いだせばいいのか・・・分からないんです。」

本音だった。

本当に分からなかった、どうすればいいのか・・・

「生きる。」

声が・・・

「決して諦めるな、どんなに辛くても、苦しくても、生きてさえいれば希望はある。」

光が・・・

「地獄のような時代でも、生きる事を決して諦めるな、どんな絶望の中でも諦めさえしなければ希望という名の光が消え去る事は無い、・・・絶対にな。」

心に届いた。

「まだ見ぬ明日に怯えて、今を後悔するなんて事は絶対にするな。」

涙が溢れる。

「退けば老いる、臆せば死ぬぞ、下を向くな、上を見ろ、後ろ見るな、前を見る、希望はすぐ眼の前にある。」

「はい・・・はい!。」

銀髪の男は、一瞬此方を振り返り微笑むと直ぐに顔を引き締め、賊達に向かって走り出した。

あっという間に百人近くいた賊達は倒されていった。

銀髪の男は、賊達を倒すと村の出口へと歩いて行ってしまった。  
私は、慌てて追いかけて声を掛けた。

「あの！村を助けて頂いてありがとうございます！  
御名前を教えて頂けませんか？」

銀髪の男は一度だけ振り返り名乗った。

「白銀、白銀・紅蓮だ。」

銀髪の男、白銀は背を向けて歩き出した、振り返る事無く。

いつの間にか、雨が止み雲の隙間から光が差し込んでいた。  
その光は、その村に希望をもたらしているようにみえた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6066z/>

---

真 恋姫無双～戦いを終わらせる者～

2011年12月20日22時02分発行